

# 琉球大学学術リポジトリ

## 批判的思考は良い思考か?

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道田, 泰司, Michita, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/529">http://hdl.handle.net/20.500.12000/529</a>

# 批判的思考は良い思考か？

道田 泰司<sup>1</sup>

## Is critical thinking good thinking?

Yasushi MICHITA

### 要 約

本稿では、批判的思考が良い思考であるのかどうかについて、意思決定と問題解決に焦点を当てて検討した。まず、すぐれた意思決定はきわめて批判的思考的であり、創造的な問題解決には、批判的思考的な技能が活かされていることが確認された。しかし、潜在的意思決定や暗黙の前提の存在を指摘することは、他者には受け入れられがたいことも多く、問題解決から離れる可能性のある、必ずしも良いとはいえないものであることが指摘された。これらは「解決・評価志向」と「探究志向」の批判的思考という枠組みで考察され、批判的思考の持つ「良さ」と「良くなさ」の2面性について論じられた。

### 1. はじめに

本稿の目的は、批判的思考とは何かについて考えることである。この問題には数多くの議論があり(道田, 2004など参照), 本稿ですべてを論じることはできない。しかし, いまだ論じられていない問題も多数あるのではないと思われる。本稿では, 観点を絞ることによって, 批判的思考がどのようなものかを, 本稿の範囲に収まるぐらいのサイズで論じてみることにする。

批判的思考の定義にはさまざまなものがある。数ある批判的思考の定義の中で, おそらく最も多く引用されるのは, Ennis (1987など) の「何を信じ何を行うかの決定に焦点を当てた, 合理的で反省的な思考」というものである。この定義は, 信念と行動という思考の「目的」と, 合理的で反省的という思考の「方法」に着目して定義されている。

筆者自身も, 批判的思考の定義をいくつかの観点から考えているが, たとえばその内訳に着目し

て簡単に表現するならば, 「見かけに惑わされず, 多面的にとらえて, 本質を見抜くこと」(道田, 2000) と表現できる。「批判」という面に着目するならば, 「批判を通して深められる思考」である。これをさらにシンプルにするならば, 批判的思考とは「良い思考」(good thinking) と言うことができる(道田, 2001)。批判的思考を良い思考とみなす考え方は, たとえばZechmeister & Johnson (1992) でも見ることができる。あるいはPaul (1995) も, 批判的思考の定義を複数あげの中で, 「自分の思考をより良く, より明確に, より正確に, より防衛力のあるものにしようとするときの, あなたの思考についての思考の技法」という定義を挙げている。この中には, 思考を「より良く」する (to make your thinking better) ことが批判的思考であることが述べられている。

批判的思考を良い思考と考えることが可能ならば, 批判的思考と, 思考心理学で扱われる諸概念との関連が明確になるように思われる。思考心理

<sup>1</sup> 学校心理学教室 (E-mail: michita@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学で扱われる概念としては、たとえば「問題解決」「意思決定」「帰納的推論」「演繹的推論」「確率判断」「創造的思考」「メタ認知」がある。これらを「良く（あるいはより良く）」行なうことが批判的思考ということである。

このうち、「推論」や「確率判断」に関しては、バイアスに陥ることなくより良く客観的に推論し判断することが批判的思考とほぼ同義であることには異論はないであろう。ではそれ以外のものについてはどうであろうか。そこで本稿では、これらのうち、意思決定と、創造的な問題解決という2つに絞り、それを「良く」行なうことと批判的思考の関係について検討する。

## 2. 「すぐれた意思決定」としての批判的思考

まずは意思決定である。批判的思考と意思決定の関係を考えるに当たっては、『すぐれた意思決定』（印南，1997）が参考になる。この本は「すぐれた意思決定」や「すぐれていない意思決定」を論じているわけであるが、それは結果的に、我々の認知能力とその限界を論じることになっており、批判的思考を論じることになっている。中でも同書の大部分を占めているのは、直観的意思決定の落とし穴としてのさまざまなバイアスの説明である。この点は、道田・宮元（1999）やZechmeister & Johnson（1992）のような、心理学者が批判的思考について論じた本と同じ発想ということができる。

印南氏は意思決定を「判断と選択」と定義しているが、その過程をボックスモデル的に並べた合理的な意思決定モデルは、現実の意思決定には役に立たないと述べている。それは、「世の中は、あいまいで情報が少なく、あるいは矛盾する情報だけで、時には問題の定義すら容易ではない」ために、「全ての選択肢を同時に比較検討して、最もよいものを選ぶというアプローチがとれるのは稀」（p.17）だからである。

これは、伝統的（規範的）意思決定理論が間違っているという意味ではない。そのまま実現するには、あまりにも現実が理想状況とかけ離れているために「実際には使えない」のである。その障壁になるものは、世界が複雑であること、情報が歪むこ

と、我々自身の認知能力に限界があること、同調圧力などの集団状況があること、などである。そのために、さまざまな問題が生じ、合理的な判断を行なうことは、現実的には難しくなるのである。

ではそれを踏まえたうえで、どうしたら迅速かつ創造的な意思決定ができるか。それは一言で言うと、常にバイアスや同調圧力などに気を付け、判断状況を含めた記録をつけるなど、「意思決定の良い習慣」をつける（p.311）ことである。もう少し詳しい表現としては、次の記述がある。

なるべく、問題を多角的に捉え、想像力と創造力を働かせ、多くの選択肢を生成し、それぞれの選択肢の将来の帰結をできる限り正確に予測して、合理的な決定ルールに基づいて選択するという（p.295）

これがいわば、筆者の考える「すぐれた意思決定」ということであろう。本稿冒頭で、批判的思考についての筆者（道田）なりの定義として、「見かけに惑わされず、多面的にとらえて、本質を見抜くこと」を紹介した。この定義と上の表現は、「多面的に捉えること」「合理的に判断すること」という点で同じであり、またその背後には、「見かけに惑わされないこと」＝「バイアスに気をつけること」がある。このことから、良い意思決定が批判的思考的なものであることがお分かりいただけよう。

なお、このような良質の意思決定は、基本的に我々は苦手であり、理屈はわかっていてもなかなかそうはうまくいかないものである。それに関して筆者は、「認識」を改めることを、次のように提案している。

- いろいろな可能性を想像すれば、不確実性を強く意識してしまうため、極端な場合には、行動を起こす意欲を無くしてしまう。想像によって促された不確実性を受け入れることを学ぶことが重要である。（p.264）
- 発散が大きいということは、さまざまな意見が出され、意見の対立が生じるということである。意思決定の質を高めるためには、このようなスムーズでない意思決定プロセスの方が健全であ

る、という認識を共有することがまず重要である。(p.296)

このように、思考プロセスの前提として、不確実性をもち、スムーズでないものの方が健全であると考えることが重要である。この認識は、いわゆる「批判的思考態度」、あるいはその背後にある「可謬主義」的認識(道田, 2000)と同じものである。このような態度が重視されるという点でも、良質の意思決定と批判的思考とは同種のものと言える。

### 3. 「創造的な問題解決」としての批判的思考

次に、創造性や問題解決と批判的思考の関係を、『創造力をみがくヒント』(伊藤, 1998)を通して考えてみる。同書は、創造的にするにはどうしたらよいかについて書かれた一般書であるが、創造性について、新たな視点を提起している興味深い本である。同書では創造性を、「新たな問題にぶつかったときに、自分なりに対処する力」(p.12)と定義している。従来の創造性の定義は「新しく価値のあるものを生み出すこと」というものである。これが「生み出す」という結果主義であるのに対して、伊藤氏の定義は「自分なりに対処する」(その結果として失敗してもOK)ことに力点が置かれた「行為主義」である。また従来の定義が「価値」という社会的な側面を暗に示している創造性であるのに対して、伊藤氏の定義は「自分なり」(社会的に価値のないものでも構わない)と、個人的創造性に焦点が当てられている。これは、従来の定義とある意味まったく逆の提案をする斬新なものであるが、従来は軽視されがちであった行為や個人に焦点を当てることは、大いに意義のあることと思われる。

同書では、創造的にするための「戦略」としてMRS理論が提唱されている。Mは内発的動機づけ(Motivation)、Rは知識(Resource)、Sは技能(Skill)である。この3つが必要であるというのは、批判的思考も同じである。また伊藤氏は、MRSが分野別であることを強調している。ある分野で創造的だからといって、他の分野でも創造的とは限らない。「分野が違えば、必要なM

R Sは基本的に別のもの」(p.101)なのである。批判的思考もこれと同じく、領域特異的な面があることが、何人かの論者によって強調されている。

この戦略の話の中でも、「技能」に関しては、単なる創造というよりも、創造的な「問題解決」に焦点が当てられており、Bransfordの「理想的な問題解決」理論(IDEAL理論。問題の発見、定義、解の探索、実行、評価の5ステップ)を用いて説明されている。そこには、きわめて批判的思考的な考えを見ることができる。

伊藤氏が資源を柔軟に活用するための技能として挙げられているのは、以下のものである(箇条書きしたのは項見出し、カッコ内は、伊藤氏の説明を要約したもの)。

- 視点・視野の転換(もの見方を変えてみる)
- 逆転発想(ふつうと逆に考えてみる)
- 馬鹿なことを考える(まじめ一本だとどうしても考えが狭くなりやすいので、思いっきり馬鹿なことを考えてみる)
- 失敗をおそれるな(失敗してもいい、失敗したらやり直せばいいんだくらいの気持ちでいるほうが、資源の柔軟活用につながる)
- 人の話を聞く(自分とちがう考えの人、ちがう資源をもっている人の話を聞くことにより、ひとりよがりになるのを防ぐ)
- 外に広がる知能を(人とのつながりをもつことが創造性には大事。自分にとって嫌なことも率直に言ってくれるような「辛口人間」が、できれば親しい間柄にいることが望ましい)
- ユーモアをどうぞ(ユーモアには、ひたすら一本道を直進しようとする私たちの頭に、「ほらほら、そんなに真っ直ぐ前ばかり見ないで、ほかのところも見たら」と声をかけてくれる働きがある)(以上, p.224-230より要約しながら引用)

ここに挙がっているものはどれも、「視点を変える」ための方策を具体的に示したものである。視点を変えることは、今現在持っている自分の考えや視点に対する「批判」から始まることである。また視点を変えることの目的は、そうすることで思考を深め問題解決を促進するものである。そういう意味では、これらは「批判的

思考の戦略」の話、と言っても違和感がないようなものばかりである。またここから、問題解決には「創造」が必要であり、創造のためには（主に自分に対する）「批判」が必要である、という意味で、上質な創造的問題解決は、批判的思考を行なっていることと同じと言えるであろう。

#### 4. 「潜在的意思決定」としての批判的思考

以上、意思決定や創造的な問題解決を「良く」行なうことが批判的思考的であることを見てきた。では批判的思考とは、単純に「良い」ものであるのか。本節ではそのことをみていく。

先に述べたように意思決定とは、判断と選択、すなわち状況を判断し一つの選択肢を選択するという行為である。それは通常、意識的に行なわれる。しかしこのような通常の意識的な意思決定の外にも、もう一つの意思決定があることを矢守(1997)は論じている。それは、意思決定の「土台」となる意思決定である。例えば、状況を判断して2つの選択肢を考え、そこから一つに選択するという状況を考える。ここでは、2つの選択肢「から」選ぶという意識的な選択の前に、2つの選択肢「を」選ぶという、おそらく無意識の意思決定が行なわれている。矢守氏の挙げている例で言えば、「今日の会議を何時に開くか」という意思決定の背後では、「会議を別の日に開く」という選択肢や「会議を開かない」という選択肢は（潜在的に）棄却されている。これを矢守氏は「潜在的意思決定」と呼ぶ。なお、2003年10月10日時点で、インターネット上の検索エンジンGoogleを用いて「潜在的意思決定」を検索すると2件しかヒットせず、しかもそれらは矢守の用法とは違うようである。つまり、潜在的意思決定とは矢守氏独自の用法のようであるようであるが、潜在的な意思決定が存在することを指摘することは、これはきわめて重要なことであると考えられる。

潜在的意思決定を念頭におくと、あらゆる意思決定は、「目下問題にしている顕在的な意思決定それ自身と、その基底に隠れている潜在的な意思決定との合成物」(p.91)ということができる。「基底に隠れている意思決定」とは、意思決定「枠組み」の意思決定と言ってもいいであろう。

意思決定は一般的には、「いくつかの可能な行動の選択肢から一つを選ぶこと」(繁栞, 1999)と定義されている。この定義で言うならば、いくつかの可能な行動を選ぶ「可能性の判断」に関わる意思決定ということができる。

このように分けて考えたとき、「批判的思考」的な意思決定においては、「潜在的」意志決定を「顕在化」し吟味する行為が含まれてよいであろう。潜在的な意思決定を行なっていることを意識するという行為は、自分が潜在的に行なっていることを意識し批判することによって、より広く深く吟味した上で意思決定を行なうということだからである。

では、意思決定において潜在的なレベルまでを検討対象とするということは、どういうことであろうか。特に、そのことは他者にはどのように理解され評価されるであろうか。そのことについて、矢守氏は次のように指摘する。

ある顕在的な意思決定に取り組んでいるときに、それを支える潜在的な意思決定（の結果）に疑問を呈する発言をすると、次のような2つの極端な反応を招くことになる—「何、馬鹿なこと、言ってるんだ」。または、「天才的な閃きだ！」(p.91)

このように、潜在的な意思決定に疑問を呈するという批判的思考的な行為が「愚者」とみなされる可能性があるのであれば、批判的思考を単純に「良い」とみなすことがよいとは限らなそうである。しかし潜在的な意思決定を意識化することが「愚かな」ことだとは、少なくとも提起者本人は考えていないはずである。ではなぜそのように捉えられてしまうのであろうか。それは、潜在的意思決定が「常識」「当たり前」を土台としてなされているからである。そのことを、矢守氏は次のように述べている。

潜在的な意思決定の内容はいったんあたりまえとして固定化すると、内側からそれに気づくことは非常に困難だということである（気づくのは、天才であると上で述べた）。しかし反面、それは、あたりまえの外側からは容易に把握されることも多い。いいかえれば、異なる潜在的意志決定に支配されて活動す

る（顕在的意志決定を行う）他者〔中略〕と出会い、交流することをとおして、自らを包み込んできたあたりまえは了解可能なものになる。（p.93）

すなわち、「なぜ愚者という評価になりうるのか」といえば、それは、指摘された本人は自分のあたりまえには気づきにくいからである。さらにいうならば、そのことに気づいたとしても、よほど適切な別の土地（＝土台としてのあたりまえ）でもないかぎり、住み慣れた土地から離れることは難しいからであろう。その指摘が見るべき点を持っていたとしても、そのことに気づくためには、自分のあたりまえが皆にとってもあたりまえというわけではなく、あくまでも「自分にとって」のあたりまえでしかないことに気づく必要があり、他人の持つ「別のあたりまえ」に触れ、それをある程度主観的に理解することにより、別のあたりまえがあることを知る必要がある。

つまり、土台や枠組みや潜在性を指摘する批判的思考は、よほどうまくやらなければ、理解されにくく、受け入れられにくい。その意味で、潜在的意思決定をも掘り起こすような批判的思考は、必ずしも「良い」とばかりはいえないのである。

## 5. 暗黙の前提

しかし、潜在的意思決定を意識化する中で行なわれるような、その人にとっての「常識」や「当たり前」を問題にすることは、果たして本当に批判的思考の中に含まれる行為と考えられているのであろうか。本節ではそのことを確認しておく。

批判的思考の領域において、このような常識や当たり前は、「暗黙の前提（仮定）」と呼ばれ、理論的研究者の多くは、明示的に提示されている議論要素だけでなく、暗黙の前提を同定し検討することを重視しており、代表的な批判的思考概念研究者が挙げている定義や概念リストの中には、必ずといっていいほど含まれている（道田，2004）。

たとえば Brookfield (1987) は、批判的思考がどのようなものであるかを表現する際に、「自分や他人の思考や行動の底にある仮定（the assumptions underlying our and others' idea and actions）を反省し、別の思考や生活の方法

を熟考すること」と述べている。

批判的思考スキルリストの中に見られる暗黙の前提としては、以下のようなものがある。Ennis (1987) の「批判的思考カリキュラムの目標」の中には、批判的思考スキルリストの1つとして「仮定を明らかにする」(identifying assumptions)が含まれている。Paul (1995) が挙げている批判的思考の4領域のうちの「思考の要素」には、「与えられた推論・視点・目的の底にある仮定 (assumptions underlying given inferences, points of view, and goals) を同定する」が含まれている。Facione (1990) の批判的思考スキルリストには、結論や前提と並んで、述べられていない仮定や前提 (unstated assumptions or presuppositions) を分析することが、議論を分析する技能として挙げられている。

定義や概念リストだけではない。Watson & Glaser (1980) の批判的思考テストには、「与えられた命題や主張のなかにある、述べられていない仮定や前提 (unstated assumptions or presuppositions) を認識する」テストが含まれている。あるいは Keeley (1992) の実証的研究では、仮定を探すことを批判的思考の重要な側面と考え、大学生の仮定を探す能力の学年差を検討している。このように、暗黙の前提を検討することは、批判的思考の中でも重視されている技能・要素なのである。

## 6. 暗黙の前提を疑うということについて

このような暗黙の前提を検討することの重要性について、4節では矢守 (1997) に依拠して論じたが、実は2、3節で取り上げた本でも、「それぞれの考え方の前提を意識的に問いかける」(印南, 1997, p.303), 「知らず知らずの思い込み、暗黙の前提は、やはり資源の柔軟活用を邪魔します」(伊藤, 1998, p.221) と、暗黙の前提に注意すべきことが記述されている。ただし、矢守のように丁寧に論じられているわけではないし、それがもたらす負の帰結（「何、馬鹿なこと、言ってるんだ」）について触れられているわけではない。本節では、暗黙の前提を検討することの負の帰結について、もう少し検討しよう。

暗黙の前提を検討することを積極的に取り入れている分野としては、社会学がある。そのことを、『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』（遥，2000）を通して試みることにしよう。この本は、芸能人である遥氏が、議論において「確実に、的確に、瞬時に、相手に打ち勝つ方法」（p.14）を知りたくて社会学者の上野氏のゼミに入り、見聞し考えたことをまとめた本である。遥氏は上野氏から、社会学における「疑う」ということについて、次のように言われている。

学問は訓練であること。社会学は枠組みを疑う訓練。法学は法という枠内での訓練。それぞれの学問にそれぞれの専門的訓練があること。「疑う」という訓練を積むことで、枠を超えた発想が可能になること。（p.204）

多くの学問が、その「枠内」での訓練を主眼としているのに対し、社会学（の全てではないだろうが）では、枠組み（＝暗黙の前提）を疑うことをその枠組みとして持っているのである。

遥氏は、3年のゼミ経験から、上野氏に学んだ議論（＝ケンカ）のしかたを十箇条にまとめている。そこには、「前提を疑う」ことから来ると思われる議論のしかたが含まれている。それに該当すると思われるものを挙げてみる（カッコ内は、遥氏の説明を要約したもの）。

- その1 『守るための開き直り』（「～で何が悪い」と開きなおる）
- その2 『守るための質問、わからない編』（相手が無自覚に安易に使用している言葉や表現に対し、質問する。相手が自明のものとして使用している場合ほど、効果がある。相手をもてあそぶには秀逸な手段。）
- その3 『守るための質問、〇〇ってなに？編』（あらゆるイデオロギー装置を問いただす方法だ。この質問は核心探しであると同時に、相手の無知探しでもある。これは男性と二人っきりのときはしないほうがいい。バカな男性ほど暴れだす。）
- その4 『攻撃の為の質問、そのまんま編』（たとえば「フェミニズムには国家理論がない」

という意見に対して「フェミニズムに国家理論は必要でしょうか？」と問い返す。とにかく相手に喋らす。そして破綻を待つ。矛盾を待つ。卑怯なやり方だが、比較的簡単な攻撃法だ。）

- その5 『広い知識をもつ』（多読をし、引き出しが多くなると、相手の一元的理論に対し、迷わず「待った」がかけられる。安直な物言いには「それはあなたの信念です」で待ったをかけ、聞く耳すら持たないで本題へと移行する。）
- その6 『ワクを超えた発想をする』（ここにあるものを疑うことで初めてそのワクの存在を認識できる。疑うことなしに、つまり可視化なしの超越は不可能だ。これはワクを疑わない人を間違いなく苛立たせる。議論にならないというより、議論してあげない技術といってもいい。）
- その7 『言葉に敏感になる』（どんな些細な言葉でもいい。不用意に出た言葉、無自覚に使われる表現、曖昧になっている言語、すべて攻撃対象だ。戦いはそこからしか始まらない。）（以上、p.218-225より要約引用）

以上、十箇条中7つで、「暗黙の前提を疑う」と関係のある方策が出てきている。それらは、「その背後にはどんな価値が仮定されているのか」を問う批判的思考のための適切な問い（Browne & Keeley, 1998）となっているのである。

念のために補足しておく、問題点や弱点を突くあらゆる議論は、その問題点や弱点を成立させている前提をはずして考えるならば成り立たなくなる。あるいは弱いものになってしまう。議論の背景に考えられる仮定は無数にありうるので、原理的には議論を強いものにも弱いものにもすることも可能だし、どれが妥当な仮定なのかを決定することはできないからである（McPeck, 1990）。その意味で「その1」にある「～で何が悪い」をはじめとして、「わからない」「〇〇ってなに？」というような開き直りは、前提を問う問いにつながるのである。

そしてここで注目していただきたいのは、遥氏はこれらの多くについて、ポジティブではない表

現や評価を与えているということである。「相手をもてあそぶ手段」「バカな男性ほど暴れだす」「卑怯なやり方」「聞く耳すら持たない」「ワクを疑わない人を間違いなく苛立たせる」という具合である。

もっともこの本は「ケンカを学んだ」本であるし、この十箇条は単なる「議論のしかた」ではない。章タイトルにも「ケンカのしかた・十箇条」とつけられており、議論の「ケンカ」的な側面が強調されている、という事情はあるであろう。しかしそれは、矢守氏のいう「何、馬鹿なこと、言ってるんだ」と相手に言わせることと通じるものがあることも確かである。それは、こちらが「ケンカ的な議論をしよう」と構えているかどうかは別にして、こちらと相手の土台（常識、あたりまえ、枠組み）が一致していないことから生じる問題である。したがって、こちらにケンカ（あるいはもてあそんだり、卑怯な手段をとる）のつもりがなくても、暗黙の前提を疑うということは、相手を苛立たせる危険性があるのである。つまりここで言いたいことは、前に述べたのと同じく、「批判的思考とは、必ずしも「良い」とばかりはいえない」ということである。

## 7. 批判的思考の「良さ」と「良くなさ」

ここまで、批判的思考の「良さ」と「良くなさ」という、まったく正反対の側面を見てきた。この両者の関係について検討してみる。

まず言えるのは、本稿で見てきた「良さ」と「良くなさ」とでは、「良い」の意味が違っていることである。2節と3節で扱った「良い思考」としての批判的思考では、問題解決なり意思決定がより「深い」ものになるような思考を指して「良い」と言っていた。自分の視点や直感の偏りを自覚し、より広い範囲を検討し、多くの可能性を考えた上で結論を出すことが「良い思考」ということである。

それに対して4節以降、批判的思考の「良くなさ」を指摘したのは、批判的思考が時として他人に「馬鹿なこと」と受け取られ、あるいは相手を「苛立たせる」可能性があるため、単純に「良い」とは言えないという指摘であった。すなわちこち

らでは、深さ（だけ）ではなく、他者に受け入れられるかどうか「良さ」の基準となっていたのである。その点、2節で取り上げた伊藤（1998）では、あくまでも中心にいるのは意思決定者や問題解決者であり、他者は脇役としてのみ存在する。伊藤（1998）が、社会的創造性よりも個人的創造性（「自分なりに対処」）を重視しているのはその象徴である。もちろん他者が出てこないわけではないが、それは「ひとりよがりになるのを防ぐ」ための助言者なのである。あるいは、他者との意見の対立が「質の高い」意思決定につながるという考えは、対立が必ず解消（止揚）されることを前提とした考えであり、その限りにおいて深さ＝良さという図式が成り立つのである。

この点から考えるならば、良さと良くなさの対立点の中は、単に人に受け入れられるかどうかだけでなく、解決可能性の高さもあると言えるかも知れない。すなわち、良い思考とは、（より良い）問題「解決」や意思「決定」につながる思考ということである。解決に至らないにしても、問題が解決される方向に考えを進めていく可能性のある思考である。あるいは、バイアスに陥るなどして「良くない」方向に思考が進むことを未然に防ぐことのできる思考である。これらはどれも、広い意味で解決可能性の高さと呼ぶことができよう。

それに対して、暗黙の前提から問い直すということは、問題は解決方向ではなく、解決とは逆の方向に戻されることになる。それは、その問い直しに反対し受け入れない他者がいなくても同じである。問題解決が前進することを押しとどめ、以前は考えてもいなかった問題を「掘り起こす」ことで、問題解決を振り出し（場合によってはそれ以前）に戻す。それは問題解決というよりは問題不解決であり、意思決定ではなく意思不決定である。問題を深く掘り下げるといふと聞かえはいいが、「傷口を広げる」と表現することも可能である。あるいは、新たな傷を見出すことでもある。問題解決ではなく問題発見である。いや、発見されるのであればまだいいほうかもしれない。場合によっては問題を見失うだけで終わってしまうかもしれない。

しかしそれでも、それは安易に結論を出さず問



題を考え続けるという意味では「良い思考」ということができる。これは、思考のプロセスに対する評価であって、結果の良し悪しに対する評価ではない。すなわち、解決可能性が高い思考を良いと評価するのは、思考の「結果」に対する評価、解決可能性が低い（かもしれない）思考を良いと評価するのは、思考の「過程」に対する評価、そして「過程」として良いものが「結果」として良いとは限らないのである。

## 8. 2種類の批判的思考

このように考えるならば、批判的思考と呼ばれるものは、大きく2種類のものがあると考えることができそうである。一つは、「解決志向的」な批判的思考である。批判的思考が良いものとしてイメージされるときは、基本的にはこちらを指しているであろう。本稿冒頭で紹介した Ennis の批判的思考の定義（何を信じ何を行うかの決定に焦点を当てた、合理的で反省的な思考）では、「反省的」という思考の過程を表す表現も含まれているが、焦点は「決定」に当てられており、解決・評価志向的な批判的思考が念頭に置かれていると考えられる。問題などを明確化し、正しく論理的に推論して適切な結論を出す（あるいは出ているかどうかを評価する）ことを批判的思考と考えている Pascarella & Terenzini (1991) などもある。これらでは、明確な結論を出さなくても、現在出ている結論や理由のよしあしを論理的に「評価」することも批判的思考の範疇に入れられている。その意味では、「解決・評価志向」と呼ぶのがいいかもしれない。

それに対して、決定や評価に焦点を当てるのではなく、暗黙の前提に焦点を当てること、あるいは「疑う」ことに力点が置かれた批判的思考概念も存在する。5節で引用した Brookfield のもの（思考や行動の底にある仮定を反省）もそうである。また、McPeck (1981) の「反省的な懐疑をもってある活動に携わる態度と技能」というものもそうであろう。ここで焦点が当てられているのは、「懐疑をもって活動に携わる」ことであって解決や評価ではないからである。このようなタイプの批判的思考概念をどのように呼ぶのが適切か

はわからないが、これらが何を志向しているかという、問題を掘り下げ、探求し続けるという態度や活動のように思われる。その意味では、解決・評価志向に対して、反省志向、探究志向、態度志向、活動思考などと呼べるかもしれないが、さしあたりここでは「探究志向的」な批判的思考と呼んでおこう。

なお、上のような書き方だと、2種類の批判的思考という何か特別な思考が「実体」として存在しているかのように理解されるかもしれないが、そういう意味ではない。我々が思考を深めようとするとき、批判（懐疑や問いや吟味なども同じ）を重要な武器として用いることがある。そのような、批判が重要な位置を占める思考があったとき、その武器を強調して表したのが「批判的思考」という語なのである（道田, 2004）。したがって、批判的思考という語そのものの中には、その目的というか目指す方向性は明示されていない。思考の目的にはさまざまなものがありうるであろうが、そのひとつとして、問題を解決することを目的として批判を用いて思考を深める行為が、解決・評価志向の批判的思考である。解決よりも問題をより深く掘り下げることが目的として行われるのが、上でいう探究志向の批判的思考である。これらは、力点の置かれ方の違いはあるものの、我々が通常行っている思考と同類（あるいはその延長線上）の思考と考えるべきであろう。

この解決・評価志向と探究志向という2つの批判的思考は、今述べた目的の違いのほかに、何に対して批判の矢を向けるか、という対象の違いがある。探究志向の批判的思考では、暗黙の前提をはじめとして、問題を根っこから掘り返すことに役立つものはすべて批判の対象となりうる。それに対して、解決を志向して批判的思考を行なうのであれば、暗黙の前提など、解決や前進のための障害となりうることを深く検討しすぎるのはあまり賢明とはいえないであろう。そこで検討対象となりうるのは、問題や結論、理由などの議論要素であり、それらを明確化し、理由の適切さを主に論理的な観点から検討し評価する、という非形式的論理的な検討が中心となる。仮定も検討対象になる場合もあるであろうが、解決を志向するのであれば、前進が難しくなるほどに深く仮定を検

討することはあまり得策とはいえないので、探究の深さという点では、一般的には、解決・評価志向の場合は探究志向の思考よりは浅くなるであろう。

なお、ここでは両者の違いを強調したが、しかし実際の思考活動の中では、両者は、まったく別物というわけではなく、場合によっては両者が一体となって思考が進むことも大いにあるであろう。例えば、ある問題を解決するべく思考を深め、一定の解決に至ったとしても、すぐにその解決自体を見直し、そこに隠れている更なる問題を発見し、検討対象とする、というような作業はえんえんと繰り返すことができる。そのときその思考は、解決を志向しつつも、停止することなく反省し探究し続ける思考となりうる。筆者自身造詣の深い分野ではないので適切な例かどうかはわからないのだが、フェミニズムの歴史について触れている書物（たとえば江原・金井，1997；伊藤・牟田，1998；大越，1996）を読むと、フェミニズムはフェミニズムそのものもつ矛盾と限界を克服するために、絶えず批判され脱構築されているようすが伺える。これは、解決と探究が繰り返される批判的思考のプロセスと考えることが可能ではないかと思われる。

この両者は一体となりうるだけではない。一方から他方へと容易に移動しうるものでもあると思われる。基本的には問題解決のために批判的思考を行なおうと思っているとする。しかしその際にも、よりよい解決を得ようとするならば、6節の冒頭でも紹介したように、暗黙の前提を検討する必要が出てくる場合もある。その結果が、容易に問題の再定義に結びつき新たな問題解決に向けて走り出せる場合もあるであろうが、そうではない場合もありうる。そのときそれは、解決に向かわない探究志向的な批判的思考へと結果的に移行していることになる。もっとも、探究志向的な（すなわち直接解決を志向しない）批判的思考であっても、いつかは何らかの形で問題を再定義し目標を定め解決に向かった走り出さなければならない。そうでなければそれは、批判的思考というよりは、単なる「批判」に終わってしまうことになる。あるいは、前提を疑うことが新たな前提の構築につながり、解決につながる場合もあるであろう。こ

のように両者は、容易に移行しうるし移行すべき関係にあると考えられるのである。

## 9. 「なめらか」と「ごつごつ」

前節では、批判的思考の解決・評価志向と探究志向という2面を検討したが、次に、これを我々の日常世界の中に位置づけてみよう。本節ではそのことを考える前段階として、人が社会化する過程に関する奥村（1997）の考えを紹介する。

奥村氏は、社会を説明するのに、「ごつごつ」と「なめらか」という言葉を用いる（以下は、その内容を筆者なりに理解したものである）。「社会」は、新参者やその社会に馴染んでいない者にとっては、「さまざまなしきたり」を押しつけ「ざらざら」した違和感を感じさせるものである。しかし、その社会の常識を身につけたり、自分の感じる違和感を切り捨てて忘れてしまうこと、すなわち慣れたり諦めたりすることによってそのざらざら具合が感じられなくなれば、その社会はその人にとって「なめらか」なものになる。それは、その社会の「あたりまえ」が自分の「あたりまえ」になることであり、その社会が居心地の良いものになるということである。そのことを奥村氏は「やわらかで脱げないヨロイが身体の周りにはりついている」（p.14）というイメージで表現している。そして社会学は、その世界の住人が意識していない「あたりまえ」の世界を成り立たせている基本の道筋を示す学問だというのである。それは、6節で引用した上野氏の「社会学は枠組みを疑う訓練」ということと基本的に同じである。

この論考の中で奥村氏は、前に述べたような「批判的思考に対するネガティブな反応」と同じような反応が「なめらかとごつごつ」の世界にもあることを、次のように記している。

なめらかな世界に生きている人は、それをごつごつした世界へと引き戻されることをひどく嫌う。とくに他人によって。他の誰かが、ごつごつした世界を掘り出し、見せようとするとき、人は、「あたりまえ」のなめらかな層を上塗りしてそれを見えなくしたり、それを掘り出した人に、なめらかな世界を壊すな！と抗議させたりする。なめらかな世界を押し付け、

はみ出したものを隠し、もとに引き戻す力。たとえば、だれかが表明する「違和」を、「なるほど君のいたいことはわかった、でもね」と懐柔したり、「君だけだよ、そんなことをいうのは」と排除したりすることによって、なめらかな世界をつづけようとする。「あたりまえ」は、そこから「自由」になろうとする人を引き戻すか、「自由」になってしまった人を追い出すかして、なめらかな世界を守るのだ。こうした人と人とのあいだに働く「力」によっても、なめらかさは維持される。(p.18)

「なめらかさ」は、そこからはみ出そうとするものを引き戻したり、排除することによって維持される。それはちょうど、人のもつ「信念」が自己永続的な性質を示す(Zechmeister & Johnson, 1992)との相同である。信念の場合は、情報の選択的知覚や記憶によって守られる。自分の信念に合った事柄は選択的に注意が向けられ、よく記憶される。逆に信念に合わない事柄は無視されたり別の意味づけがされたり、記憶から抜け落ちる。あるいは、曖昧な情報は自分の信念に沿う形で変形され受け入れられる。これは主に個人内で起きるプロセスであるが、これと同じようなことが個人間でも、なめらかさ=その社会のあたりまえを維持するために見られるというのである。

なお同書は社会学の入門書であるので、ここで書かれていることは、社会学的な概念を思い起こせば理解が可能であろう。たとえば「家事などの再生産活動は不払い労働である」とか、「日本の教育は階級の再生産装置である」とか。妻が(無償で)家事に専念することを「あたりまえ」と思う人や、「日本の教育は平等なものである」と信じている人は、このように言われることを嫌い、排除しようとするであろう。そしてその事情は、「暗黙の前提を超えた発想をする批判的思考」に対するまなざしも、まったく同じものがありうる。それは、批判的思考の持つ、「常識を疑う」ことに対する、「常識」側からの、ある意味正常な反応なのである。

もっとも、「なめらかな世界」を「あたりまえ」として生きていくことは、悪いことではない。というよりも、ある種の自由や余裕を得るための大切な道具なのである。そのことを奥村氏は次のよ

うに指摘している。

「なめらか」な世界を生きていくための「あたりまえ」をはじめとするさまざまな道具を私たちはもっている。こうした道具の性能は、私たちが生きていくために、とても大切なものだ。たとえば、ほとんどのことが「なめらか」に身につけているからこそ、いちいち問い、判断せずに私たちは生きていける。それは、人といっしょに「社会」を作るときもそう、で、「家族」や「学校」や「会社」のなかで大半のことが「なめらか」に進んでいく。そして、生きることのかなりの部分が「なめらか」で、考えないですむことによって、それ以外のことを問い、考え、判断する可能性を私たちは手に入れることができるのだ。(p.30)

ただし奥村氏は続けて指摘しているのだが、その「自由」は、「その枠組みの中での自由」である。というのは、その前の引用にあるように、なめらかな世界は、そこからはみ出そうとするものを引き戻したり排除することで自己永続する力を持っているからである。

以上、人が社会の中で「なめらか」に生きることが、社会の持つ「なめらかさ」は自己永続的な性質を持つこと、世界を「なめらか」に生きることはある意味必要なことでもあることが、奥村氏の論考より確認できたかと思う。

## 10. 「ごつごつ」した思考としての批判的思考

さて、社会をこのようなものと捉えたとき、批判的思考はその中にどのように位置づけられるであろうか。いささか図式的にはなるが、本稿で考案した「解決・評価志向」と「探究志向」の批判的思考を、その中に位置づける試みを行なってみよう。

奥村氏が指摘するように、われわれが日常生きている世界はなめらかなものである。そこで通常は、「思考」や「問い」「判断」などは最小限にしかなされないことによって、「なめらかさ」が保たれる。これが、批判的思考も含め、思考的なものがあまり必要のない、なめらかな日常の世界である。

思考や問いや判断が必要になるのは、何らかの意味でなめらかさが破られる事態である。しかし日常的に行われるそれらは、日常の「なめらかさ」（常識や経験）を基準として行われ、速やかに「破れ」を修復するために行われるものである。したがってこのレベルで行なわれる思考は、批判的思考というよりは、どちらかという無批判的な思考であろう。意思決定や問題解決も同じである。印南（1997, p.13）は「我々の日常生活は、毎日、意思決定の連続である」と述べるが、その直後に挙げられている例は、本の購入、傘の持参、部下の動機づけなどのための選択のような、ごく日常の意思決定である。これらも、場合によっては困難な問題となることもあるが、毎日ルーティン的に選択し判断していることも多い。そういう場合は、常識や経験の範囲内で、すなわち批判的思考的に熟考することなしに、直感的、無意識的に行なわれるのである。それが、我々が毎日行っている意思決定や問題解決の実態であろう。それは、奥村氏が言うように、「それ以外のことを問い、考え、判断する可能性」を手に入れるための手段となっているのである。

なおこのレベルの思考や批判（批判的思考ではない）は、3歳前の幼児でも行う。筆者の娘を例に挙げて説明すると、筆者が娘の前で、わざと間違えて歌を歌ったりすることがある。すると娘は、すかさず「違うよ」とか「間違ってるみたーい」と指摘する。こういうことが、2人の娘とも、3歳前から見られた。これは、その場で従うべき「ルール」と現実とのズレを指摘する言葉である。ズレの指摘は、自分の生活経験や知識から、どちらかという自動的に出てくるものであり、批判によって思考を自覚的に深めているわけではない。このようにルールからのズレを指摘し修正することで、なめらかな世界は速やかに回復され保たれるのである。

しかしそれでは問題が解決しないことがある。あるいは、そこで得られる解決や決定が十分に適切とは言えないことがあるかもしれない。そのようなときに役に立つのが、印南（1997）や伊藤（1998）のような本であり、解決志向的な批判的思考の知識や諸技能であり、論理的思考の知識である。あるいは、自分とは考え方の異なる他者と

議論したり意見を聞いたりすることである。これらは基本的に、常識や経験の範囲で直感的・無意識的に行なわれていた思考を意識的・論理的・客観的・冷静に問い直し、点検し、思考の枠を（問題解決に支障のない範囲で少しだけ）広げることにより、以前より良い解決を模索することを可能にしてくれる。なお、上記の本はそれ「だけ」を論じているわけではない。しかし、意思「決定」、問題「解決」という枠組み上、基本的には決定や解決につながらない方向の思考は、あまり重視されていないはずである。上に述べた「自分とは考え方の異なる他者の意見」も、その他者があまりにも自分と共有するものが少ないのであれば、おそらくその意見は解決の直接の足しにはなりにくいであろう（もっとも、近すぎると異なる視点からの問い直しになりにくくなるために、やはりより良い解決には結びつきにくいのだが）。ここでも、基本的に志向されるのは解決であり、速やかに（そして以前より良く）「なめらかさ」を回復することである。その意味で解決・評価志向の批判的思考とは、問題が生じて「ごつごつ」した世界を「なめらか」にするための思考ということができよう。解決志向とは「ごつごつ」を修復して「なめらか」にする思考であり、評価志向とは、ある議論を不適切な議論と評価することによって、「なめらか」の外に追いやる思考である。そうして、なめらかさは保たれるのである（ただし、論理的評価によって保たれるのは論理的な意味でのなめらかな世界であり、それが常識や経験とズレることはありうる）。

それに対して、「探究志向」的な批判的思考は、やや趣が異なるように思われる。それが、「解決」ではなく、前提や自明性を問うなどして「問題をより根っこから掘り返す」ことを志向するのであれば、それはもはや、「なめらかさ」を維持することにはつながらない。むしろ、なめらかさの下にある「ごつごつ」をあえてむき出しにする作業である。解決・評価志向の批判的思考が「ごつごつ」したものを「なめらか」にする思考であるならば、探究志向の批判的思考はその逆で、一見「なめらか」に見えるところに「ごつごつ」を見出し、白日の下にさらして疑問を投げかける思考と言える。その意味で批判的思考的に問題を掘り

下げることはある面、解決に直接つながらないとしてもしんどい作業であり、人に受け入れられにくい結果を生み出す可能性の高いものである。しかし批判的思考にそのような側面があることは、意識しておく必要があるであろう。もちろん、7節で述べたように、探究志向的な思考も、いつかは解決に向かわなければならぬ。先に挙げた奥村(1997, p.32-35)も、社会学が「私たちの「なめらかさ」を見えるようにする」ことで、「それを変える可能性」や「対話」が生まれるという。つまり社会学も、「ごつごつしたものを見せる」ことが目的というよりは、それを変えたり理解することが視野に入っている。しかしその前段階としては、それが「見える」ように、ごつごつ・ざらざらした言葉で描く必要があるのである。批判的思考も、それをとことん深めることは、ごつごつ・ざらざらしたものなのである。なお哲学者の中島(2000, p.54)は、そのようなごつごつした言葉を「その社会において危険な言葉」、なめらかな言葉を「世間語」(一定の社会の基本的な価値観や美醜観、規範意識や風潮にそった安全無害な言葉)と呼んでいる。この「危険な言葉」は、基本的に前提を疑う探究志向的な言葉と同義であろう。つまり批判的思考とは、ある面危険な思考なのである。

なお、前提を疑うことがもつもうひとつの危険な側面についても、簡単に触れておこう。それは、「探究を志向することなく前提を疑う」ことの危険性である。6節で引用した逄氏が言うように、前提を疑うことで、相手をもてあそんだり卑怯なやり方で議論を進めることが可能になる。それは同じく6節で引用したMcPeck(1990)が言うように、仮定の置き方次第で議論の強さを原理的には無数に変えることができるからである。ということは、「自分の意見を守る」ために相手の意見の前提に疑問を投げかけることが可能であることを意味する。Paul(1995など)のいう「弱い意味の批判的思考」である。弱い意味の批判的思考とは、批判的思考の技能を選択的かつ自己欺瞞的に使うことにより真理ではなく自己利益を守ろうとする自己中心的な思考であり、自分自身の思考の枠組みをも深く問い自分自身とは反対の視点や枠組みに共感することも含む、本来的な批判的思

考(強い意味の批判的思考)とは別物なのである(Paul, 1987)。このような目的で暗黙の前提を疑うことを「探究志向」と区別して表現するならば、それは、「自己防衛志向」の批判的思考と呼ぶことができよう。それは、「自分にとってのなめらかさ」を保つために「相手をごつごつしたものととして」攻撃する思考である。

## 11. まとめと課題

解決・評価志向と探究志向の批判的思考のあり方を念頭におくならば、本稿で提起した「批判的思考の良さと良くなさ」については、次のように言えるであろう。批判的思考を「批判を通して思考を深めること」と考えた場合、このような行為それ自体は、良いものでも良くないものでもない。というか、良いものにも良くないものにもなりうる。そのことを図1に図示してみた。

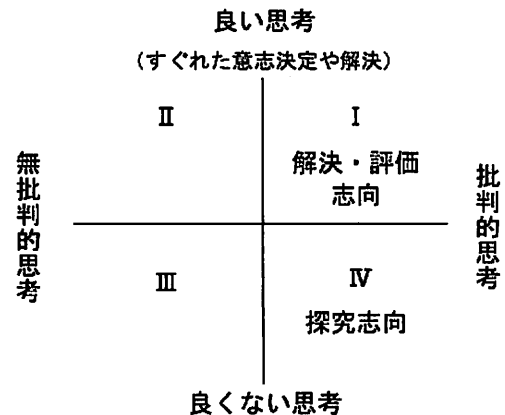


図1 批判的思考と良い思考

すぐれた意思決定や問題解決を行っているときは、その中に批判的思考が含まれていることは多いであろう(I)。そうなりうるのは、「解決」を志向して批判的思考が行なわれるときである。あるいは結果として解決に至った場合である。ただしそのためには、暗黙の前提などに対してあまり深い問い直しを行なわないほうが得策である。そうすることは、思考が解決に向かわなくなる恐れがあるからである。

無批判的(たとえば権威追従的や常識・経験依

存的)に考えたとしても、それが「結果として」すぐれた意思決定や問題解決になることはありうる(Ⅱ)。またもちろん、すぐれていない意思決定や問題解決は多くの場合、浅慮(＝無批判的思考)に支えられることが多いであろう(Ⅲ)。

しかし、批判的思考が必ずしもすぐれた結果を生むとは限らない(Ⅳ)。場合によっては、意思決定や問題解決を土台から崩し、意思「不」決定(決められない、振り出しに戻る)や、問題「崩壊」が起きないとも限らない。とくにそれは、前提が問われれば問われるほど起きることかもしれない。しかしそれは、「問題発見」の糸口となる可能性を秘めている。したがって場合によっては、早急な解決よりも、深い問い直しを行なうべきときもある。そこで行なわれる批判的思考は、解決を志向しない探究志向の批判的思考ということができ、解決に至りにくく他者に受け入れられにくいという意味で、単純に良いとはいえない思考と言える。

ということは批判的思考は、単なる良い思考というよりは、良いものにもなりうる思考ともいえるし、批判的思考が良い思考であるかどうかは、良さの定義やその思考の目的による、と言うことができよう。大雑把には、あるいは広い意味では良い思考と考えてもさしつかえないかもしれないが、とことん批判的に考えることは、なめらかに見える世界に潜む「ごつごつ」をむき出しにする危険性を持っていることは知っておいてもいいであろう。

さて、本稿における基本的な考察は以上である。本稿は、いくつかの本を読みながら自分の日常の思考活動を反省することを通して得られた探索的な論考であるので、今後検討すべきことは多い。まず第一に必要なのは、実際の思考活動を題材に取り上げながら、このような2つの側面を持つものとして批判的思考を考えることがどれほど、どのよう有用であるかを検証することである。また、それがある程度確かめられるのであれば、その上で、一連の思考過程の中での両者の兼ね合いや移行の様相についても明らかにする必要がある。また、ここで考えたことが、他の批判的思考の分類概念(たとえば論理主義と第二波(Walters, 1994))とどのような関係にあるのかも検討

する必要がある。そのような作業を通して、本稿の考察をより精緻にすることが今後の課題である。

## 引用文献

- Brookfield, S. D. 1987 *Developing critical thinkers: Challenging adults to explore alternative ways of thinking and acting*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Browne, M. N. & Keeley, S. M. 1998 *Asking the right questions: A guide to critical thinking*. (5th Ed.) New Jersey: Prentice Hall.
- 江原由美子・金井淑子(編) 1997 フェミニズム新曜社
- Ennis, R. H. 1987 A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Ed.) *Teaching thinking skills: Theory and Practice* (pp.9-26) . New York: W. H. Freeman and Company.
- Facione, P. A. 1990 *Critical thinking: A statement of expert consensus for purposes of educational assessment and instruction*. New Jersey: American Philosophical Association (ERIC Doc. No. ED 315 423).
- 遥 洋子 2000 東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ 筑摩書房
- 印南一路 1997 すぐれた意思決定—判断と選択の心理学— 中央公論新社
- 伊藤英雄・牟田和恵(編) 1998 ジェンダーで学ぶ社会学 世界思想社
- 伊藤 進 1998 創造力をみがくヒント 講談社現代新書
- Keeley, S. M. 1992 Are college students learning the critical thinking skill of finding assumptions? *College Student Journal*, 26, 316-322.
- 奥村 隆 1997 社会学になにができるか—なめらかさからの距離— 奥村 隆(編) 社会学になにができるか 八千代出版, Pp.1-38.
- 大越愛子 1996 フェミニズム入門 ちくま新書
- Pascarella, E. T. & Terenzini, P. T. 1991 *How college affects students: Findings and insights from twenty years of research*. San Francisco:

- Jossey-Bass Publishers.
- Paul, R. W. 1987 *Critical thinking and the critical person*. In D. N. Perkins, J. Lochhead, & J. C. Bishop (Eds.) *Thinking: The second international conference* (pp.373-403). New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Paul, R. W. 1995 *Critical thinking: How to prepare students for a rapidly changing world*. California: Foundation for Critical Thinking.
- McPeck, J. E. 1981 *Critical thinking and education*. New York: St. Martin's Press.
- McPeck, J. E. 1990 *Teaching critical thinking: Dialogue and dialectic*. New York: Routledge.
- 道田泰司 2000 批判的思考研究からメディア・リテラシーへの提言 コンピュータ&エデュケーション, 9, 54-59.
- 道田泰司 2001 批判的思考—よりよい思考を求めて— 森敏昭 (編) おもしろ思考のラボラトリー—認知心理学を語る3— 北大路書房, Pp.99-120.
- 道田泰司 2004 批判的思考概念の多様性と根底イメージ 心理学評論, 46, (印刷中).
- 道田泰司・宮元博章 1999 クリティカル進化論—『OL進化論』で学ぶ思考の技法— 北大路書房
- 中島義道 2000 「哲学実技」のすすめ—そして誰もいなくなった… 角川書店 (新書)
- 繁樹算男 1999 意思決定 中島義明・安藤消志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 CD-ROM版 有斐閣
- Walters, K. S. (Ed.) 1994 *Re-thinking reason: New perspectives in critical thinking*. New York: State University of New York Press.
- Watson, G. & Glaser, E. M. 1980 *Watson-Glaser Critical Thinking Appraisal*. New York: The Psychological Corporation.
- 矢守克也 1997 集団意思決定の合理性・非合理性 広瀬幸雄 (編) シミュレーション世界の社会心理学—ゲームで解く葛藤と共存— ナカニシヤ出版, Pp. 89-102.
- Zechmeister, E. B. & Johnson, J. E. 1992 *Critical thinking: A functional approach*. CA: Brooks/Cole Publishing Company. (ゼックミスタ&ジョンソン 宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡 (訳) 1996 クリティカル・シンキング 入門篇 北大路書房)